

# 鳥取・陰田小犬田遺跡

- 1 所在地 鳥取県米子市陰田町
- 2 調査期間 一九九四年(平6)四月～十二月
- 3 発掘機関 (財)鳥取県教育文化財団
- 4 調査担当者 北浦弘人・熊谷 朗・山川茂樹
- 5 遺跡の種類 水田跡・自然流路跡・遺物散布地
- 6 遺跡の年代 縄文時代前期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(米子)

陰田小犬田遺跡は、米子市街地の南西方約二・七km、鳥取と島根の県境が走る丘陵東側の谷あいの沖積地に位置する。県境は、そのまま旧伯耆国と旧出雲国の国境にあたり、遺跡地は旧伯耆国会見郡に属している。遺跡地の谷奥から南方へ約二kmほど山道を辿ると、旧山陰道へ行きあたり、そこから西へ向かうと程なく旧出雲国意宇郡に抜ける。

調査は、国道九号線バイ

パス米子道路建設に伴うもので、鳥取県教育文化財団により一九九三年度から三カ年の計画で開始された。第二年次の一九九四年度調査は、陰田小犬田遺跡の推定主要範囲南北四〇〇m、東西八〇mのうち、谷の下流側約七一〇m<sup>2</sup>を対象として実施した。

遺跡は、小河川の氾濫原上に立地しており、沖積作用の安定期を迎えた中世以降に、水田経営が開始されたとみられる。以後現代まで連綿と続く水田層の存在を確認、最下層の畦畔を検出している。

水田層は、周辺丘陵部に存在する遺跡群からの流れ込みと思われる遺物の包含層でもある。縄文時代前期から近世にいたる時代の各種遺物が出土しており、そのうち量的に主体となるのは、六世紀末から八世紀後半にかけての土器類である。水田層下では自然流路を検出し、埋土中の遺物は八世紀後半を下限としている。

遺物の出土量は多く、整理用コンテナに約五〇箱を数えた。須恵器、土師器が大半を占めるほか、竈、支脚、土鍾、製塩土器、須恵質土馬、木製品(皿・曲物・柄・へら・火鑽板・建築部材など)、石製紡錘車、鉄製品、鉄滓、轡の羽口などが出土している。土器類には、須恵器の漆壺や漆の付着した須恵器片、土師器片が含まれる。

木簡以外の文字に関わる遺物としては、円面硯二点、墨書土器八点を数える。墨書土器はいずれも須恵器で、杯の底部か蓋の天井部に記されている。破片のため判読できないものが多いが、「館□」と確認できるものが二点ある。第二字はウ冠を戴く文字とみられる。

墨書土器は、杯の底部に回転糸切痕が観察され、当地では八世紀後半に比定されるものである。

# 8 木簡の釈文・内容

(1) □知□

(70)×29×(10) 019

調査区のほぼ中央地点、水田層下の自然流路氾濫堆積層中からの出土である。長方形状で、裏面は剝離している。左右側面は原形をとどめるものの、下側は二次的な切断を受けており、上側小口面はやや腐蝕し、破損の有無が判然としない。材の樹種はスギである。

三文字が確認できるが、第二字の「知」のほかは判読し難い。一字目は「母」または「丑」の可能性があるが、文意は不明である。

本遺跡からは、多量の鉄滓が出土しており、分析の結果精錬鍛冶滓とともに製錬滓が検出された。韃の羽口の出土とも併せ、遺跡の周辺には、七～八世紀頃の製鉄関連遺跡の存在が推定される。木簡、陶硯、墨書土器などの官衙的性格を帯びた遺物の出土は、鉄生産体制への官人層の関与を窺わせるものと考ええる。今後周辺遺跡の調査の進捗を待つて、さらなる検討を期したい。

木簡の解説については、鳥取県立博物館の坂本敬司氏に、材の樹種鑑定については、鳥取大学農学部古川郁夫氏にご教示をいただいた。

(北浦弘人)



木簡出土状況



S=1/1